

<書評>

加藤公明・和田悠編『新しい歴史教育のパラダイムを拓く —徹底分析！加藤公明「考える日本史」授業』

須賀忠芳*

本書のあとがきにおいて、加藤公明は、次のように述べている。「通読して思うことは、私はなんて幸せな実践者なんだろうということである。(中略)私の教師としての行いの意味を執筆者それぞれが独自の観点から解き明かしてくれている。この本の中には私の知らない私がいる。しかし、それは確かに私なのである」(280頁、以下、頁表示は本書による)。歴史教育、社会科教育に関わる者として、優れた実践家としての加藤公明の名を知らぬ者はいない。世にいう加藤実践をめぐって、それを分析し、その魅力や価値について検討を加える「加藤公明実践研究会」が和田悠を中心に組織され、その討議の中間報告として本書が編集されたという(11頁)。そこにおいて、加藤実践が多くの論者によって評されるとともに、加藤自身がその実践をふりかえる形で本書は構成されている。浅学の身であって、本書全体を論ずることは心許ない限りであるが、加藤実践に大いに刺激され、歴史教育の新たな可能性を模索してきた者の一人として、本書の意義とその若干の課題について評することとしたいと考える。

本書は、5部17章で構成され、各部の構成は、序論／第Ⅰ部 戦後歴史学・歴史教育と加藤実践／第Ⅱ部 加藤実践の教育学／第Ⅲ部 教育実践の現場と加藤実践／第Ⅳ部 加藤公明のライフストーリー／第Ⅴ部 加藤実践の現在、からなっている。

まず、各部に即して、内容を確認しておきたい。第Ⅰ部は、成田龍一「『戦後歴史教育』の実践について」、前田徳弘「『考える日本史』授業の成立」、北尾悟「加藤実践に見る『歴史学の成

果に学ぶ』ということの意味」、柄澤守「絵画資料の教材化と加藤実践」、和田悠「歴史を叙述する主体をつくる歴史教育」からなっている。成田は、「戦後歴史教育」の経過について、Ⅰ「通時的把握を前提としたうえで『歴史認識』を重視」した時期(1945-70年)、Ⅱ「歴史における『主体』の強調」(1970-95年)、Ⅲ「歴史の『語り』」(1995年-)として区分し、加藤実践について、「戦後歴史教育」Ⅰへの批判を基底としつつも、「Ⅰの成果を継承しながら、Ⅱとして生徒に二重の主体性を強調するものとなっている」(21頁)と評している。前田は、宮原武夫の授業実践が加藤実践に与えた影響を論じ、「宮原の生みの苦しみ」(35頁)を経て、加藤実践が成立したことを明示している。また、北尾は、加藤の教材分析について、「教材を歴史学が明らかにした成果(事実や解釈)の面から肉付けしていく方向」と「生徒の歴史認識や現代意識を背景にしつつも加藤自身が教材を分析・解釈して、歴史学への提起していく方向」があると評し(50頁)、討論学習実施の背景としての「教師自身の学問研究の成果への主体的な学び」(51頁)が重要であることを明らかにする。柄澤は、『一遍上人絵伝』福岡市をめぐる加藤実践の「追試」と千葉県歴教協における学びあいを基とした筆者自らの絵画史料を活用した授業実践を提示し、「加藤の授業論が、絵画史料の新たな活用法を生み出す原動力となった」と評している。さらに和田は、加藤実践の特徴として「歴史学を『消費』する位置に生徒を閉じこめず、自らの手で史料を読み解き、歴史を考え、その結果を表現すること、すなわち歴史を叙述する主体として

*東洋大学

生徒を育て、歴史的思考の面白さと有効性を実際に体験させるところにある」(70頁)と論じている。

第Ⅱ部は、佐貫浩「加藤実践の基本的特質と評価枠組」、白井嘉一「教育方法学からみた加藤実践」、外山英昭「歴史学習における主体性と加藤実践」、青木孝太「加藤実践における主体形成」からなる。佐貫は、加藤実践について、「生徒を、主体的な歴史的真理探究者(研究者)の位置に就けること」(101頁)を目標としつつ、その実現のために「教師の指導性とイニシャティブ」が「授業の舞台設定と技術指導において主要に行使されている」(93頁)として性格付けた上で、本多公栄の「『基礎的知識の伝達』に力点」(101頁)を置いた実践と比較することで、その特色を明らかにしている。白井は、加藤と安井俊夫の間で交わされた「加藤・安井論議」を手がかりに、系統学習論の基本ともされる「教育内容と教材の区別論」について、加藤の論を踏まえて「『教育内容』が内在化されている『教材』から『教育内容』をアプローチしていく」方向と「教師の提示する『教材』のみならず、子ども自身が発見し提示する『教材』をも位置づけて、教師と子どもたちによって共に『教育内容』をアプローチしていくような方向」(115頁)を位置づけることについて提起している。外山は、加藤実践について「一人ひとりの認識を育てることにこれほどこだわった高校日本史の実践を他に知らない」(118頁)として評価し、自らも加藤実践に基づいた模擬授業を展開し、その有効性を確認している。また、青木は、「主体」をめぐるフーコーの理論を引きながら、加藤実践の下での生徒たちは「教科書や教師という『知』に拠るのではなく、なによりもまず自己自身の違和感に忠実であろうとする」点で、「教師である加藤自身をも問い返す『主体』である」とし(138頁)、「主体」としての生徒たちを形成していく加藤実践の意義を見出している。

次いで、第Ⅲ部は、小林朗「中学校教師から

みた加藤実践」、楳澤和夫「学ぶ意欲を引き出し、学ぶ意味を実感させる討論授業」、三橋広夫「加藤実践の世界史像」、若杉温「加藤実践を追試する」からなり、それぞれ、加藤実践から学びつつ、討論授業が困難であるとされる中学校(小林)「教育困難校」(楳澤)において取り組んだ実践、「国家の論理」を相対化する実践(三橋)、先行の実践を踏まえて自分なりの方策で取り組んだ「応用実践」(若杉)をまとめたものである。その中で、楳澤は、「研究者の研究成果と、生徒が討論などを通じて形成した歴史認識を比較することは重要であるが、歴史認識の優劣を論ずることは無意味」(162頁)、「いかに『稚拙』であろうと、自らの問題意識や課題意識をもとに獲得した歴史認識でなければ、自分の生き方を支える内在的な歴史認識にはならない」(163頁)と論じ、加藤実践について「歴史学の成果とは獲得する対象ではなく、自らの歴史認識を形成するために活用する対象であるというスタンスで一貫している」(163頁)と評している。

さらに、第Ⅳ部は、加藤公明「歴史教育の諸課題と千葉県の歴史教育活動について」、荒沢千賀子「わくわく探訪『加藤実践の生まれる現場』」からなる。加藤は、自らのあり方をふりかえりつつ、「かつて歴史学を研究する者として読んだ時には読み飛ばしていた箇所、教師=授業者としての私は重要な価値を見出していった」(205頁)とする歴史教育者の立ち位置を明示するとともに、生徒を「歴史認識の主体として成長させ、平和と民主主義の担い手に育てるにはどのような授業をつくりだせばいいのか」(213頁)とする事柄を命題とし、「試行錯誤、いや悪戦苦闘の連続だった」(同)と回顧している。また、荒沢は、加藤の授業を受けた卒業生から聞き取りをするとともに、加藤が2冊のノート回して生徒が毎時間の授業記録と感想を交代で記入し先生に提出する「授業ノート」を丹念に検証し、加藤実践の後景を明らかにするとともに、加藤からの聞き取りを通じて、「目の前にい

る子どもたちと一緒にあって、その生徒たちがよりこの問題を深く認識していくためにはどういう授業をつくっていったらいいかって考えていく」(233頁)とする、授業実践への姿勢としての加藤自身の言を引き出している。

第V部は、加藤公明「歴史を熱く語り合う高校生」、渡辺哲郎・松井延安・加藤美緒「加藤実践を受け継ぐ」からなっている。前章は、加藤が、2010年11月に行った授業実践を自ら検証したもので、内容は、15世紀前半に起きた正長の徳政一揆をめぐって、その時の農民たちの行動を、当時の法律や規範に基づくものではなく、各自の価値観、正義感、歴史観に照らして、有罪とすべきか、無罪とすべきかを生徒に討論させるものである。その中で、加藤は、生徒の発言を取り上げつつ「遠い過去のできごとではあるが、他人事としてではなく自分の問題関心に引き寄せて、なにより自分自身が納得できる答えを得ようとして真剣に考え、みんなにわかってもらおうと取り組んだこと」は、「歴史を主体的に認識する」ことであり、「歴史教育の目的が歴史認識の主体として生徒を成長させることとすれば、それは、このような生徒を育てること」にあると論じている(257頁)。後章は、当授業の参観録を中心に、20代半ばから30代半ばにかけての若手教員が、その論評をまとめている。その中で、渡辺は、教師側が、「自分の考えが伝わったと感じた時に、授業が成立したと感じてしまいがち」だが、「その時、本当に生徒の知識や意欲が身につけているのかと、今一度考えなおしてみる必要性」があるということを当授業の参観後に思い至ったとしている(267頁)。

歴史教育研究において多くの成果を残す本書について、編者の和田の言を参照しつつ、その意義について論ずれば、以下の3点に集約することができる。

第一に、研究対象としての把握が難しかった教育実践研究において、理論と実践に関する客観的な分析を通じて、その研究手法の体系化が

なされた点である。実践研究は、実践者自身がその成果を検証する場合が多く、また、その分析は、予定調和的な受講生徒からのアンケート調査等を基としてその成果をいわば「自賛」して結果分析の体をなした、とするものも多い。その点、本書は、多くの研究者、実践者から加藤実践に対する客観的な分析が寄せられ、先述のように、当の加藤をして「私の知らない私がいる」と言わしめる、当実践の客体化と理論化に成功しているのである。第二に、加藤への聞き取りと、加藤自身がこれまで度々言及してきた「授業ノート」の検討がなされ、実践の背景とその基礎をなしているともいえる加藤と生徒との濃密な関係性が明らかになったことである。「授業ノート」には、「どのページにもだいたい6カ所くらい加藤によって赤ペンで下線が引かれ、びっしりとコメントが書き込まれている」(218頁)のであり、そうした加藤の熱意を感じ取り、授業参加への強い動機づけを得た生徒たちのコメントは、「一学期に多かった授業についての意見や先生と交流する」ものから、「歴史への具体的な言及とクラスの仲間への」ものに変化していく(221頁)。加藤実践の本質が、その深遠な授業構想と卓越した授業技術に帰せられることは疑いようもないが、また一方で、その根幹を、授業者と生徒との分かち難い信頼関係に帰すことができる。そうした関係構築の経過の一端が公にされたことは、その実践理解を進めていくことに大きく寄与するものと思われる。第三に、実践者としての加藤の変化と成長の過程が明示されることで、歴史教師のライフコースの一端が認識されえたという点である。生徒の学力低下が喧伝される中、一方で、教員の側も、煩瑣な日常業務に忙殺され、学習素材への能動的なアプローチや授業研究の工夫が疎かにされている傾向もある。実際、いわゆる官制研修はともかく、その他の授業研究会等に積極的に参加する教員は少なくなっている現状もあり、また、教員同士で授業論を論じあうといった情景もな

かなかみてとれなくなっている。そうした中、加藤が、千葉県高等学校教育研究会歴史部会や「常に学びの場を与えてくれる大学のようなものであった」(206頁)とする千葉県歴史教育者協議会日本史部会等における活動を通して歴史教師として成長した様を述懐する内容は、教師の学びのあり方の一つの規範を明瞭に示すものとなっていると意義づけることができる。同時に、今度は、そこでの加藤の姿に学び、それを「追試」し、自らの力量を高めていく教師像が明示されることで、その学びの正統性が再確認されることとなっているし、また、加藤実践の手がかりを読者としての多くの教員が獲得できる構図ともなっているのである。

一方、本書に、あえてその課題を挙げるとすれば、加藤がその実践において、批判と討論を重視しているにも関わらず、本書においては、当実践に対する批判的な文章が見当たらないという点が挙げられる。いわば、加藤実践のシンパが集まって、それをほめそやすばかりの構図となっていて、加藤実践に対する多角的な視点が見出されていない。本書では、それぞれの執筆者による、加藤実践を批判的に捉える今野日出晴の論(今野『歴史学と歴史教育の構図』東京大学出版会、2008年)への反批判等の一節が、管見では8カ所にわたって見出すことができる(9頁、26頁、46頁、69頁、88頁、129頁、151頁、160頁)。その異例な掲出のされ方は、今野の論説がそれだけ特徴的で、影響力があったことの反映なのであろうが、見方を変えれば、あたかも加藤実践への反論は許さないとする頑なな意思の表示とも捉えられかねない。執筆者の多くがそれだけ今野の論に執着するのであれば、今野自身にも執筆を委ね、加藤実践のより多面的な理解が図られるための志向性があったのではなかったのではないだろうか。本書は、歴史教育における一授業者の実践を、多くの研究者、現場教師が検討し、論及していくという、他に例を見ない画期的なものであると捉える事ができ

るが、反面、いわば「加藤礼賛」の度合いが強すぎて、その批判的な見方が提示されないことは、その客観的分析の視点からは、やや物足りないように思われる。加藤実践の称揚に終始することは、加藤自身にとっても本意ではないのではあるまいかと思われてならない。

そうした観点を踏まえつつも、歴史教育に関わる者として、評者は、本書における加藤の次の一節に感慨を抱かずにはいられない。「臨床の経験と病理の研究が車の両輪となって医学が進歩し、難病の子どもたちを救っているように、歴史教育も実践と研究が、互いの主体性を尊重しつつも、緊密な協力関係を築いて、子どもたちを立派な市民に育てられるようにしたい」(209頁)。これは、加藤の、歴史教育に対する強烈とも思える意思を明示した文章である。現代医療の課題の一つには、患者の様態を見ようとはせず、病因だけを探り、治療は薬に頼る対処療法に終始するばかりである、とする点がよく挙げられる。このことは、教育においてもあてはめることができるかもしれない。そこからは、生徒個々のあり方を見ようとはせず、授業展開全体の流れやその課題のみを重視し、また一方では、教師が自らの主張を単に言い放ち、自らの価値観の下で生徒を成長させてきた、とする近視眼的な教師自身の自己満足の姿が見出せる。同時にまた、子どもの姿をないがしろにして、実践と研究とがそれぞれの領分において分立し、あえて干渉しあうことを避けようとしている歴史教育のあり方に通ずるものがあるといえる。一方で、医療研究を例にすれば、その課題を強く自覚するとともに、加藤の言うように、臨床研究と病理研究が一体となって進められているものの、子どもたち(患者)に対するそうした姿勢は歴史教育において見出すことは難しい。こうした現状にあって、その両者を連結させるための多大な努力を惜しまずに取り組んできた加藤の姿には、大いに共感を覚えるものであり、また、その分析を一書においてまとめ、

公刊した本書の意義は大きい。加えて、加藤の授業実践をまとめた著書2点と、実践分析の対象となった授業映像を収録したDVDが付されていることも読者にとっては興味深く、斬新な試みといえる。そうした観点から、評者は、本書を高く評価するものである。本書の刊行が、歴史教育を取り巻く研究・実践状況をさらに深化させ、進展させていくことを強く念じつつ、拙い書評の筆を擱くこととしたい。

(地歴社, 2012年7月刊, 285頁, 3,000円+税)